

「正氣の狂人」大杉の思想

岩佐作太郎

「革命家としてのクロの著述、それは素より重要なものだ。しかし其の本當の重要さは、やはり其の科學者としての著述の重要さが分らない間は、本當に分らない。」
「嘗て、僕は鶯鶯の獄中から故幸徳傳次郎に宛てて出した手紙の一節に云つた。

「此頃讀書をするのに甚だ面白いことがある。本を讀む。バクニン、クロボトキン、ルタリユス、マラテスタ、其他どのアナキストでも、先づ卷頭には天文を述べてゐる。次に動植物を説いてゐる。そして最後に人生社會を論じてゐる。」

「やがて讀書にあきる。眼をあげてそとを眺める。先づ眼に入るものは日月星辰、雲のゆきき、桐の青葉、雀、烏、更らに下つては向ふの監舎の屋根。丁度今讀んだばかりの事を其

まゝ實地に復習するやうなものだ。そして僕は、僕の自然に對する智識の甚だ淺いのにもいつとも恥ぢ入る。これから大に此の自然を研究して見やうと思ふ。

「讀めば讀む程、考へれば考へる程、どうしても此の自然は論理だ。論理は、自然の中に完全に實現されてゐる。そして此の論理は自然の發展たる人生社會の中にも、同じく又完全に實現されなければならない。」

と云ふ、大杉の「クロボトキン研究」中に書いた一節は特に僕の注意を引く。

大杉はよく自然科學の本を讀んだ。殊にフアブルのものを耽讀した。彼れの書架にはフアブルのものは澤山ある。今から三年程前であつたらう。北風會の席上で、彼れはフアブルの「昆虫記」中の行列虫の話をした。

行列虫は松の葉を喰ふ虫で、此の虫は前にたつたものがリ

リーダーで、其のあとからぞろぞろついで行く。リーダーはこの虫でもいゝ、ただ遇然に先頭になる虫がリーダーの役をつとめる。決して異例はない。そこが行列虫たる名のある所以だ。ところが或る一日、フアブルはその行列虫の一隊を植木鉢の縁に移して、輪につないで見た。リーダーのない圓いものにして見たのだ。すると此の行列虫は、ただ皆んなの後ろを皆んなが、ただ輪になつたまゝでいつまでもぐるぐるの縁を廻つてゐる。夜になれば其の行進を止めるが、朝から晩まで、ぐるぐると廻はつて居る。翌日も其の翌日も、幾日も幾日も、圓の縁だからつくる時がなく、彼等は何時までも同じことを繰返して居る。

斯く語つた大杉は、緊張した眼を開いて僕等を見つめた。

僕等も好奇と稍や不安の心地を以て此の行列虫の前途を氣遣つた。聽て、彼れは眼を細くパチパチさせながら口を細めてあだかも金魚の水を飲む様になら、吃り出した。

「とゝゝゝとところが諸君！そこに一匹の氣まぐれものがある。ソ、ソ、それが其の鉢の縁から這つたのだ。」

彼れは又た止つた。僕等はハツと思つた。彼れの再び語る所によれば、後から後からと他の虫は其の氣まぐれの眞似を

して助かつた、と云ふのだ。

「氣まぐれ者！」秩序を追ふ人間や保守に陥る人類には、この「氣まぐれ者」は其の救ひの神だ。ああ浮世だと、人は泣き且つ苦しみながら、あへぎあへぎ同じことを繰返して居る。そこに「氣まぐれ者」が現はれる。そして人類社會は更新し、救ひ出される。

二

大杉はこの氣まぐれを、この氣まぐれの實行を正氣で實行したいと云ふ男だつた。彼れは彼れ自身の生活に於て、其の叛逆の中に、氣まぐれの中に、無限の美を享樂した。彼れは其の「正氣の狂人論」に於て云ふ。

「此の努力、此の行爲、しかも自己の生の擴充のために一切の權威と障礙とに叛逆し、突進して行く者の此の努力と此の行爲とは、習俗者から見れば、また習俗からぬけ切らぬ者から見れば、多くは狂人の努力である。本氣の沙汰でない行爲である。けれども僕は此の狂人の行爲を本氣の沙汰で、正氣でやり遂げたい。」と云つてゐる。

そして、ベルグソンの「吾々が或る重大なる決心をなすべ

く選んだ吾々の生涯の瞬間、其類に於て唯一なる瞬間、また歴史の過ぎ去つた時機が其の國民の爲めに再來しないと同じく再び現はれない瞬間「追懐」しなくてはならぬとなし、「此の瞬間を僕の所謂正氣の狂人的行爲の中に、此の崇高なる藝術の中に、既に屢々見出し、又常に見出され得るものと信ずるのだ。幾度び轉び落ちてもいい。只だ幾度でも此の山頂に登つて行きたいのだ。そこに登つて行く努力がしたいのだ。自分ばかりでない。他人にも又此の努力と行爲とを勧告したいのだ。強制したいのだ。これの出来ない奴等は又これを爲さうと思はぬ徒輩は、僕の所謂衆愚だ、歴史の創造に與らぬい怠情者だ」と喝破し、彼れは更らに進んで、此の正氣の狂人論を社會的仕事としてゐる労働運動の上に考へて、

「此處に一ストライキが起る、僕は此のストライキを以て、ベルグソンの所謂「吾々が或る重大な決心を爲すべく選んだ吾々の生涯の一瞬間、其類に於て唯一なる瞬間」としたいのだ。平凡なストライキでない。安閑として只だ腕組み許りしてゐるストライキでない、本當に労働者が重大な決心を要するストライキにだ。

「即ち巨額の維持金を擁し、永い間平穩無事に其の腕組をつ

る。そして此の欺瞞其者を教育だと心得てゐる」と彼れは見
た。「奴等が大學で教へる社會學、政治學、法律、經濟、哲
學、倫理學、其他何んの學問だつて僕等にはちつとも用のな
い今日の社會組織、今日の社會秩序の是認と維持とを基礎と
しないものがあるか。奴等が新聞雜誌の上の議論で、やはり
それを基礎としないものがあるか。先づない。稀れに少々で
もさうでないものがあつても、それはせいぜいが現在秩序の
除々たる改善位いものだ。此の除々たる改善が抑も權力階
級の擁護でなくしてなんだ。又、それを如何にも尤もらしく
理屈づけるのが、被壓制階級の欺瞞でなくして何んだ」と。
そして彼れは又、識者の玉子共にも失望した。「識者と云
ふ程でもないが、其の識者ぶる玉子がちよちよちいゐる。そ
れは例の學生、又は學校を出たばかりの奴等だ。」
「是等の徒輩も一時は盛んに氣焰を擧げた。けれども、あら
しが吹き、雷が鳴るに及んで、何れも、どこかの木かげや屋
根の下に逃げ込んで了つた。陽氣の加減で此頃ちよちよち
新らしい玉子共が出て來た。之れだつて今後あらしが吹いた
り、雷が鳴らうものなら、此所に踏み止るもの果してあるだ
らうか」と、彼れは疑つた。

づけて、それに依りて一般的社會の同情を得て、そして最後
に政府者側の干渉をして労働者の利益に終らしめんとするや
うなストライキではない。維持金も何にもなしに、短い時間
の間に、労働者のエナジーをエキステンシブでなく、イン
テンシブに集中した、本當に労働者が重大な決心を要する、
正氣の狂人的ストライキだ。労働者のエナジーと自信と、
個人的勇氣と發意心とを、其の最高潮に到らしめるストライ
キだ。

「若し總ての労働者が、斯の如き極力的戰鬥をすることを拒
みまた斯の如き生の最高の山頂に攀登ることを拒むならば、
労働者は永遠の奴隸である」と論じて居るのは、能く彼れを
現はしてゐる。

彼れは斯くして正氣の狂人たり得たいと努力した。そして
此の努力を只に自分ばかりでなく他人にも、此の努力と此の
行爲とを希望した。そして彼れは之れを所謂識者には求めな
かつた。

「元來識者と云ふ奴等は、其の智識を賣つて食つて行く奴等
だ。智識の購買力のない人間共には用はない。だから奴等は
いつでも權力階級の擁護者であり、被壓制階級の欺瞞者であ

そして彼れは夙に世界の有ゆる革命家がさうであつたやう
に、労働者の中に其の勇敢なる戰士を求めた。

三

何れの世、何れの國にても、其の社會的大變革は必ずや少
數の氣まぐれ者、大杉の所謂「正氣の狂人」の手に依りては
じめられる。そして大衆は草の風になびくやうに、又は響の
ものに應ずるやうに應ずるものである。來るべき大變革も將
さに其の然るべきは元より論ずるまでもない事である。彼の
謂ゆる科學的社會主義者の云ふやうに宿命的、必然的のもの
では斷じてない。

けれども、如何なる新社會が將來さるべきか。之れに對す
る解答は色々あらう。無政府主義者、殊にクロボトキンは云
ふ、それは民衆の其の建設しやうとする將來社會に就いての
はつきりとした觀念を持つ度合に依りて決定されると。

實際、今日まで何所の革命でも、民衆は新社會組織につい
てのはつきりした觀念を持つて居なかつた。其のために、彼
等は革命の道具とはなつても、其の建設は全く人任せで、
其の謂ゆる新社會は全く舊社會同様の他人の爲めのものにな

つて了つたのだ。

然らばどんな觀念、どんな理想を持つべきだらうか。これについて我が大杉は云ふ。

『觀念や理想は、それ自身が既に、一つの大きな力である。しかし其の力や光りも、自分で築きあげて來た現實の地上から離れば離れる程、それだけ弱つて行く。即ち其の力や光りは、其の本當の強さを保つためには、自分で一字々々、一行々々づつ書いて來た文字其者から放たれるものでなければならぬ。』

『労働者が其の建設しやうとする將來社會に就いての觀念も理想に就いても、やはり同じ事だ。無政府主義や社會民主主義や、センデカリズム、又はギルド社會主義等の將來社會に就いての觀念や理想は、或はヨオロツバやアメリカの労働者自身が築きあげて來た力や光りであるかも知れない。彼等は其の力や光りの下に進むがいい。しかし其の觀念や理想は、日本の労働者が今日まで築きあげて來た現實とは、まだ大ぶ距離がある。』

『僕等はやはり、僕等自身の氣質と周圍の狀況とに應じて、僕等の現實を高めることに努力しつゝ、それによつて僕等相

應の觀念と理想とを求め外はないのだ。

『そして其處に、僕等の謂ゆる信者の如くに行動しつゝ、懷疑者の如くに思索する、と云ふ標語が出て來るのだ。』

労働者の目下の急務は、其のせつばつまつた生活の、少々でもの改善を謀らなければならない。『此の急務に努力しつゝある間に、資本家と労働者との關係、政府と資本家若しくは労働者との關係等に就いての、其の地位を漸次自覺して來た。今日の社會制度の根本的誤謬にまでも氣づき出した。又労働條件改善のための其の努力の中に、それよりもつと強く其の心中に湧いて來る、自由の精神に目覺めて來た。』そして、『それらの労働者は今、其の眼前に見せつけられる諸種の社會的觀念や理想を其まゝ受け入れる前に、彼等自身が獲得して來た社會的智識と自由の精神との結合に努力してゐる。見本の買入れよりも、其の見本の刺戟の下に自分の品物を造り出さうとしてゐる。』

斯くて彼等は労働運動の中に、征服階級の所謂社會的眞實に對する反逆の精神を見た。『私は労働階級の人達や又はそれに同情する人達と親しく交はつて、其の人達が自分の自由を其の一身の幸福よりも重く見てゐると云ふことを、直ぐ知

つた。五十年前には、労働者は其の物質的幸福を與へられると云ふ約束と交換とに、有らゆる種類の支配者に、專制的暴君にですらも、其の一身の自由を賣つた。しかし今はもうそんな事はない。選舉された支配者に對する盲目的信仰と云ふやうな事も、ラテン諸國の労働者の間には、其の支配者が労働運動の最もいゝ首領等の中から選舉される時でさへも、

だんだんに消滅しつゝあつた。『吾々が何を要求してゐるかは、先づ吾々自身が第一に知らなければならない。そうすれば吾々は吾々自身でそれを最もよく成就することが出来る。』と云ふのが、彼等の中に廣く擴がつてゐる思想であつた。『實際労働協會の規則中の、労働者の解放は労働者自らが成就しなければならぬ。』と云ふ言葉は、一般に共鳴されて、其の心の奥深くに根をはつてゐた。』と云ふ、クロボトキンが實際労働協會内の一大傾向から學んだと彼自身の『革命家の思出』の一節は、また大杉が日本の労働運動から學んだ所であつたのだ。

『労働者の解放は労働者自らが成就しなければならない。』自分のことはすべて飽まで自分ですると云ふ、本當にしつかりとした自主心、個人の自主自恃、自由發意の思想、即ち無

政府主義の思想が労働者をして自ら革命の主人たらしめ、本當に労働者が自分等の爲めの新社會を造る事が出来るのだ。』と彼等は言つた。

——(七ページから續く)——

社會主義運動に身を投じたといふ所までで終つて了つてゐるが、しかし、軍人の家庭と其の教育。彼れの個性の強さと少年時代の亂暴。幼年學校に於ける反抗の連續。上京してからの思想の變化して行つた経路。つまり、彼れが幼時から如何にして自己を創造して來たかを知るには、この書物を読めば明らかだ。それから、大杉が革命運動に身を投じて後ち、その思想を如何にして血と骨の上に築き上げて來たかを知るには、『大杉といふ人間』を如何にして血と骨の上に築き上げて來たかを知るには、彼の名著『獄中記』を読めばいい。大杉は、此の本の中で、次の如く叫んでゐる。

『僕は監獄で出來上つた人間だ。牢獄生活は廣い世間的生活の縮圖だ。しかも其の要所々々を強調した縮圖だ。そして此の強調に對するの、等しく又強調された心理狀態を以つて向うのだ。これ程いゝ人間製作法が他にあらうか。』